

<b>Title</b>	「第三回東日本大震災国際神学シンポジウム」報告 前書き
<b>Author(s)</b>	藤原, 淳賀 東日本大震災国際神学シンポジウム実行委員会
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 19-24
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5321">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5321</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

## 「第三回東日本大震災国際神学シンポジウム」報告 前書き

藤原 淳 賀（聖学院大学教授）

東日本大震災国際神学シンポジウム実行委員会

一昨年、昨年に引き続き、フラー神学大学院と共に「第三回東日本大震災国際神学シンポジウム」を開催した（二〇一四年二月一五日「土」、一七日「月」、お茶の水クリスチャンセンター）。今回はホイートン大学からも二人の教授が参加してくださった。また今回は一九年前に大地震を経験した神戸でも、東京よりも小さな規模で、「東日本大震災国際神学シンポジウム 神戸」を開催した（二月一三日「木」、青谷福音ルーテル教会）。本報告にはこれらのシンポジウムで行われた講演、分科会発表等の主要なものが収められている。

第一回東日本大震災国際神学シンポジウムのテーマは、「いかにしてもう一度立ち上がるか——これからの一〇〇年を見据えて（How can we start again? Centurial Vision for Post-disaster Japan）」であった。これは三年間の共通テーマとなった。第二回のシンポジウムは、「苦難に寄り添い前に向かう教会（The Church: Embracing the Sufferers, Moving Forward）」をそのテーマとした。本シンポジウムでは、現場での支援の働きとのパイプを通して、その「時」の状況を見極め、日本社会におけるキリスト教会にとって最も必要かつ有益なテーマを考えてきた。

第三回目シンポジウムのテーマは「苦難を通し、壁を越えて、次の世代へ（Raising Leaders through Sufferings

beyond Walls)」とした。

「苦難を通し、壁を越えて」。日本におけるキリスト教人口はわずか一%足らずだが、その一%の中で様々な壁ができていた。教派、教団の壁だけでなく、個人的なプライドや人間関係における好き嫌い、利害関係や過去の様々な出来事の遺恨からも、極めて肉的大小の壁ができていた。繰り返すが、これらは一%の中でキリスト教会をさらに小分けにしてきた壁である。それらの壁に囲まれた小さな小さな世界の中にキリスト者は、自分（たち）だけの小さなプライドを持って各々別れて座り込んでいた。

東日本大震災はこの国と共に教会をも激しく揺さぶった。激しい苦難をこの国の人々と共に経験した教会は、それまでの多くの壁を様々な形で乗り越え、あるいは壁を意識する間も無く、支援の働きを始めた。今までの知り合いに電話をかけながら物資を分かち合い、できることを一緒にに行った。現場での働きを通して今まで知らなかった人々とも繋がり、働きがさらに広がった。彼らは、教会の外に出て行くことの大切さを学んだ。また教会外の九九%の人々にとつては、自分たちは「キリストさん」なのだを知った。教派名や特定のグループ名ではなく、人々は自分たちのことを「キリストさん」として見ておられることに気づいた。

しかし震災から一年、二年、三年と経つうちに、各団体や働き人は以前の働きに戻っていく。放っておくとお互いが以前のようにそれぞれの壁の向こう側に戻っていくことになる。われわれは、一〇〇〇年に一度といわれるこの大震災を経験した教会が、元の壁の向こうに戻っていくことを黙って見ていることはできなかった。人々の顔と顔が繋がり、今まではなかった交流が始まり、信頼関係が生まれかけていた。神の国の前味としての和解と協力の関係を発展させていきたいと思った。神のシャロームが現れている関係を持ちたいと思った。この世にあつてキリスト教会がそのような関係を持つて生きること。それは教会がこの世に対して行うことができる大きな貢献である。教派、教団の壁を越えて繋がり協力するキリスト教の実践と神学的考察。それは大震災を経験した日本のキリスト教が世界のキリスト教に対し

て行うことができる貢献でもある。さらにそれはまた、将来起こるであろう震災への備えにもなる。

「次の世代へ」。これからの一〇〇年を見据えるとき、少なくとも現在の青年たちの育成は緊急かつ不可欠の課題である。キリスト者青年たちも、その多くは、壁に囲まれた小さなキリスト教会の中にいる。この青年たちが、震災支援をした、あるいはされた経験を分かち合う場を提供することによって、様々な形で繋がる機会を提供したいと思った。福音派のキリスト者学生会（K G K）と日本基督教団の学生キリスト教友愛会（S C F）を中心に、神学校やキリスト教大学に声を掛けた。そして、昨年までは一日であったシンポジウムを二日間とし、二日目は青年の日とした。これは素晴らしい会となった。

神戸の神学校の指導者の方々が過去二年間にわたる本シンポジウムに心を留めておられた。神戸でもこのシンポジウムを行えないかとの連絡があった。実行委員会は、講師としてホアン・マルティネス先生（フラー神学大学院）を、そしてブライアン・バード先生（聖学院）と私を送ることを喜んで決定した。神戸ルーテル神学校、関西聖書神学校、福音聖書神学校が受け皿となり、「東日本大震災国際神学シンポジウム神戸」が二月一三日に持たれた。新たなフェローシップと対話の機会に大変に感謝をしている。神学研究を通じた協力的繋がりの発展は、まさにわれわれが当初から願っていたことである。

二月一五日の東京でのシンポジウム第一日目は大雪となった。関東甲信では観測史上二位の記録的な大雪で、都内でも二七センチメートルの積雪という四五年ぶりの大雪であった。会場の最寄駅である御茶ノ水を通る中央線、総武線がしばらく動かなかった。それ以外の電車も運休し、あるいは大きく遅れ、参加を申し込んでおられた多くの方が遅れたり欠席されたりした。講師陣の中にさえ会場に到着できない方々がおられた。会場に来る術がなかったのである。膝までの雪の中を何駅も歩いて来たという方々もおられた。まさに大震災のシンポジウムらしい天候であったともいえよ

う。そのような中、東北や新潟からの講師の先生方は何事もなかったかのごとく到着されていた。大雪を見越して前泊し、あるいは前日から深夜バスや電車を乗り継いで来てくださっていたことを後で知り、頭が下がった。

第一日は山口陽一先生（東京基督教大学）を総合司会者として進められた。主題講演はホアン・マルティネス先生（フラー神学大学院）による「イエスの示したように苦しみ、また仕える——災害後の意味形成について」であった。震災から三年経ち、あの出来事をどのように理解し、もし可能であるなら、いかに語るのかについて彼のメノナイト的伝統の語りの豊かさから、自らの痛みの経験も踏まえて語ってくださいました。

それに続いて「震災への関わりと震災の語り」というテーマでパネルディスカッションを持った。ご発表くださった稲松義人先生（日本基督教団常議員、日本キリスト教社会事業同盟理事長）、菊地功先生（カトリック新潟教区司教、カリタスアジア総裁）、倉沢正則先生（東京基督教大学学長）、濱野道雄先生（西南学院大学准教授）に感謝したい。

私たちのシンポジウムでは、第一回目から、共にいただく食事を大切にしてきた。今回は、準備していた暖かい食事を、雪の中来られたすべての方々と共に分かち合うことができた。暖かい交わりの時となった。

午後の分科会に間に合わなかった講師の方もいらっしやったが、六つの分科会を用意していた。すべて非常に興味深いものであったが、特に（仙台を前日に出て分科会直前に会場に駆けつけてくださった）吉田隆先生（東北ヘルプ代表）の死者儀礼についての考察は、宣教学的観点からも重要なものであると思う。

その後全体会として、デービッド・ポーアン先生（ホイートン大学）が「災害が教会に教えること」と題して講演をしてくださった。ある意味で客観的な視座からの提案として有益なものであった。

神の民が集まる時、祈りと讃美をもって始まりまた閉じるのが適切である。阿久戸光晴先生（聖学院理事長、院長）が礼拝を導いてくださり、イザヤ書六・一一―一三、マルコ八・二―二六から「切り倒された木から生まれる種子——

二度目に見えてくる世界」と題してメッセージが語られた。

最後に榊原寛先生（お茶の水クリスチャンセンター理事長）の閉会の言葉をもって初日を閉じた。

日曜日を挟んで月曜日に第二日のシンポジウムが行われた。青年のための会である。この日は雪もなく大盛況であった。藤原が総合司会を務め、K G KとS C Fが讃美を担当してくださった。それぞれコンテンツポラリーな音楽とテゼ風の讃美であり、互いの違いを主にあつて楽しみ深く味わう時となった。

キリスト教的共同体の形成に深い関心を持つておられるジョージ・カランティス先生（ホイートン大学）が「あなたは誰の足を洗うのか―苦難のただ中でリーダーを起す」と題する青年たちための主題講演をしてくださった。

青年の集まりでの食事は特に大切である。全員で豊かな昼食の交わりを楽しんだ。この昼食時には各大学等が被災地支援のパネル展示を行った。

午後からは小川真先生（K G K）と野田沢先生（S C F）のお二人をコーディネーターとして、青年たちに震災支援の発題をしていただいた。そしてそれぞれの発題の間にディスカッションの時間を設け、参加者が数人で対話できるようにした。壇上の話を聞くだけでなく主体的に自分の応答を語り、他者の応答を聞き、交わる時となった。

青年たちの礼拝として、S C Fの野田先生と学生たちの導きによるテゼ風の讃美と祈りの時が持たれた。多くの参加者にとってこれは新鮮な経験となった。

この日が、当初計画していた三年間のシンポジウムの締めくくりであった。藤原がこの三年間行ってきたことの意味とまた派遣のメッセージを語らせていただいた。青年たちがこれからバトンを受け取って走っていくのである。その準備をしなければならない。

この東日本大震災国際神学シンポジウムは、この大震災をいかに神学的に捉え、信徒にわかる言葉で語り、教会に仕えていくことを目的として始められた。そしてこの大震災を機に、教派、教団の壁を越えて、顔と顔とが見える関係を発展させていくことを大切にされた。幸いなことに、この三年間でそのような「広場」ができた。主流派、福音派等のプロテスタント諸教会だけでなく、カトリック教会からも参加をいただき感謝している。フラー神学大学院とは、このシンポジウムを定期的に継続する方向で話を進め、既に第四回の神学シンポジウムの準備を進めている。

この会の準備を共に行ってきた代表者会の皆様、当日の様々な働きを支えてくださったスタッフの皆様、また本報告のまとめのために大変な労をとってくださいました皆様に、実行委員会を代表して感謝をしたい。

第一回のシンポジウムに講演者として来てくださったグレン・スタッセン先生（フラー神学大学院）が二〇一四年四月二六日に癌のため亡くなられた。また第一回に続いて今回も講演くださったホアン・マルティネス先生を送り出してくださいました奥様のオルガさんが同じく二〇一四年六月三日に癌のため亡くなられた。日本と日本の諸教会を覚えて支えてくださった方々として特にこのお二人を覚え、本報告を捧げたい。